


 書評

 神庭重信・内海 健 編
「うつ」の構造

広瀬徹也

本書は高い志を持った二人の編者を含めた 8 人のその分野のトップクラスの執筆陣によるうつ病論である。その分野とは臨床精神病理学、医療人類学、精神分析学、神経薬理化学、臨床精神薬理学、文化神経科学と多岐にわたり、Ⅰ。現代社会とうつ病Ⅱ。疾病概念を問うⅢ。神経生物学の展開の三部構成から成る。

さて、冒頭の高い志とは編者の一人神庭重信氏の序文の次の言葉に端的に示されている。「・・・うつ病が、人類に普遍で不変なマインドの領域から、文化による修飾を強く受けるメンタリティに及ぶ領域で生まれる病だからである。・・・言い換えればうつ病論とは、ヒトの脳を探究することであり、さらには日本の社会・文化にも言及することである」。本書は神庭氏の狙いが太い軸となっており、その周りを他の著者の論文がらせん状に上昇して高い頂きに達しているように思える。

本論はもう一人の編者内海 健氏の『「うつ」の構造変動—超越論的審級の衰弱とメタサイコロジー—』と題する論文から始まる。本書のタイトルもこの論文から由来している。昨今目につく若者の未熟なうつを Freud, Klein らの精神分析理論から見直して、超越論的審級が衰弱した現代では、罪悪感が機能せずに些事に傷つきやすく、他責的になると、歯ごたえのあるうつ病論を展開している。

Ⅰのもう 2 人の著者は医療人類学者北中淳子氏と精神分析家の牛島定信氏である。北中氏は近年増加が目立つ勤労者のうつ病に焦点を当て、電通事件を過労うつ病のモデルとして、うつ病の個人因と社会因の二項対立から社会因の拡大の流れを直視し、批判も忘れない。牛島氏は人格レベルの問題として、規範意識に替って個性が尊重される時代では社会的な人格が育ちにくいと、精神科医の仕事はそれ

に至る道程に付き合うこととしている。

Ⅱの疾病概念論では 2005 年の樽見の提唱以来、燎原の火のごとくわが国の臨床現場で広まったディスチミア親和型うつ病について、初めてと思われる、厳しい批判を伴う学問的検討を松浪克文氏が展開し、古茶大樹氏は Kraepelin もその位置づけに悩んだ退行期メランコリーはうつ病とは異なるとし、微小妄想を示すこの一群を誤解の多いメランコリーという名を避けて、原不安精神病と呼ぶことを提唱している。

Ⅲの神経生物学の展開では、黒木俊秀氏がポストモダンに倣ったポストモノアミン仮説を、最新の脳科学の知見に基づき提示し、DSM を軸に展開したうつ病医療の現代史を批判的に考察している。

渡邊衡一郎氏は近年のうつ病の薬物療法のトピックスを述べる中で、重要とされるアドヒアランスも医師—患者関係の構築と同義であり、レジリエンスを高める点ではガイドラインにある非薬物療法的アプローチは共通しているとの指摘が印象的である。

最後が先にも触れた神庭氏の論文で、人の遺伝子と文化の間の共進化にも言及して、「新型とか呼ばれるうつ状態に陥る若年者は、今の日本社会・文化にアフォードされた行動(メンタリティの病)として症状を現しているのではなかろうか」と提唱、文化心理学と文化神経科学の合流は不可欠の課題と強調している。

現代のうつ病に関心を持つ医療者にとっては必読の書である。

(公益財団法人神経研究所附属晴和病院理事長)

●A5 判 232 頁 2011 定価 3,360 円(本体 3,200 円+税) 弘文堂